

“Why can't you omit *ni*?” 格助詞「に」の発話理解における役割

北海道教育大学大学院 札幌校

泉 朋子

1. はじめに

日本語の話し言葉では頻繁に格助詞が省略されるが、格助詞「に」は、主格の「が」や対格の「を」と異なり任意に省略出来ない。

- (1) 今日ね、お母さんのとこにØ 行こうと思うの。
- (2) 私がØ 太郎に/*Ø 手紙をØ あげたんだ。

(1)は、「に」の省略の有無に関わらず発話が理解可能である。しかし、(2)では「が」や「を」が省略されても文は理解可能であるが、「に」が省略されると非文となる。本研究では、なぜ格助詞「に」が他の格助詞と異なり任意に省略できないのかを、格助詞「に」の文法化と日本語母語話者による「に」を用いた発話理解の実験をもとに考察した。

2. 「に」の文法化と日本語母語話者を用いた「に」の省略実験

日本語の格助詞「に」は、他の格助詞と異なり場所を表したり(e.g., 学校に行く)、物の受領者(recipient)を表す(e.g., 太郎にあげる)など様々な用法を持つ。これらは後置詞の「に」と与格の「に」というように、異なるものであると分析されていた(e.g., Sadakane & Koizumi, 1995)。しかし、Kabata & Rice (1997)は、これらの「に」の多義に渡る用法は、格助詞「に」の文法化に起因すると論じた。Kabata & Riceによると、「に」は「机の上にある」のような物理的な物の存在点(locative)と「学校に行く」などの移動の到着点(allative)を表す具体的な意味から、「7時に会う」や「太郎にあげる」など、時の存在点や物の授与の到着点(i.e., 受領者)を表すと言った、より抽象的な意味へと文法化した。

この「に」の文法化と「に」の省略との関連性を調べるため、29名の日本語母語話者を用いて、「に」を省略した話し言葉の容認度を測る実験を行なった。日本語の雑誌や小説の会話文から、意図的に「に」を省略した話し言葉が実験文として用いられ(計55文)、被験者はその話し言葉が自然か不自然かを直感で判断した。下記は、実験文の例である。Øは省略された「に」の場所を示し、括弧内の数値は各文に対して「自然だ」と判断した被験者の割合を示す。

- (3) 今日ね、お母さんのとこØ 行こうと思うの。 (100%)
- (4) ねえ、そのCD 机の上Ø 置いといてくれる? (96.6%)
- (5) その本 部屋の机の上Ø あったよ。 (72.4%)
- (6) その椅子 部屋Ø あったな。 (13.8%)
- (7) 私、太郎Ø 手紙 あげたんだ。 (0%)

これらの実験の結果から、格助詞「に」が省略可能な場合は次の条件が満たされるときであると観察された。第一に、(3)~(5)のように「に」でマークされる名詞句に具体的な場所を表す意味(e.g., 学校、お母さんのとこ)が備わっていること。第二に、動詞に動作の終点を表す意味があるか(e.g., 行く、置く)、もしくは動詞が状態動詞(e.g., ある、いる)の場合は、名詞句に特定の存在点を表す機能(e.g., ここ、机の上)が備わっていることである。これは、言い換えればKabata & Rice (1997)の論じる、格助詞「に」の最も具体的な意味であるlocativeとallativeの意味機能を名詞句と動詞で補えるときである。(7)が非文と判断

されたのは、「太郎」には具体的もしくは抽象的な場所としての意味が含まれていないからである。(6)は、椅子が存在する「部屋のある一部（机の前など）」という具体的な存在点を、「部屋」という全体表現に抽象化したメトニミー表現の例である。この場合も格助詞「に」によって具体的な椅子の存在点の意味を補う必要があるため、「に」の省略が難しい。このように、「に」の文法化の起点である最も具体的な意味を表す「に」のみ、省略することができる。これは名詞句と動詞でその「に」の意味機能を補うことが出来るからである。

3. 考察

実験から、格助詞「に」が省略できるのは、格助詞「に」の意味を名詞句と動詞で補えるときのみであると観察された。「に」が限られた状況下でしか省略できないのは、「に」の意味が抽象化されるにつれ名詞句と動詞のみでは「に」の意味機能を補う事ができないからである。また、なぜ場所を表す「に」を省略すると、(7)のように文全体が理解不可能になってしまうのかは、Langacker (2003)が論じるように、格助詞の「に」には発話理解のプロセスにおいて重要な「参照点」を表す機能があるからだと考えられる。参照点とは、ある対象物を理解するために、手掛かりや指標となる心理的・物理的な点のことである。例えば、(5)のような場合、対象である「その本」の存在点を理解するために「部屋の机の上」を参照点とする。もし、格助詞「に」が省略され名詞句と動詞では具体的もしくは抽象的な「場所」という意味を補えなければ、参照点を定めることが出来ず、発話を理解することが困難になると考えられる。

4. 結論

本研究では、格助詞「に」は他の格助詞と異なり任意に省略できず、それは「に」の文法化と関連していると論じた。格助詞「に」は、格をマークするほかに、文法化というプロセスをたどって「に」そのものに具体的・抽象的な場所の到着点と存在点を表す意味を持つ。格助詞「に」が省略可能なのは具体的な存在点や到着点を表す「に」であり、それは「に」の意味機能を他の名詞句と動詞で補えるからである。一方、「太郎にあげる」などの「受領者」を表す「に」は、存在点や到着点の意味が抽象化されたものであり、「に」を省略すると発話が理解不可能になる。これは、格助詞「に」の抽象的な場所の意味を他の要素では補えないからである。そのため、発話理解における「参照点」を明確にすることが出来ずに、発話が理解不可能となる。

参考文献

- Kabata, K., & Rice, S. (1997). Japanese *ni*: The particulars of a somewhat contradictory particle. In M. Verspoor, K. D. Lee, & E. Sweetser (Eds.), *Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning* (pp. 107-127). Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (2003). Conceptual overlap in reference point constructions. In M. Ukaji, M. Ikeuchi & Y. Nishimura (Eds.), *Current issues in English linguistics* (pp. 87-117). Tokyo: Kaitakusya.
- Sadakane, K., & Koizumi, M. (1995). On the nature of the “dative” particle *ni* in Japanese. *Linguistics*, 33, 5-33.

用語リスト

文法化：動詞や名詞など具体的な意味を持つ内容語等が、より抽象的な意味や文法機能を担うようになり、さらには新たな文法機能を発達させていく現象。